



ARCHITORIUM

OBAYASHI DESIGN PROJECTS

ARCHITORIUM

VOL.04



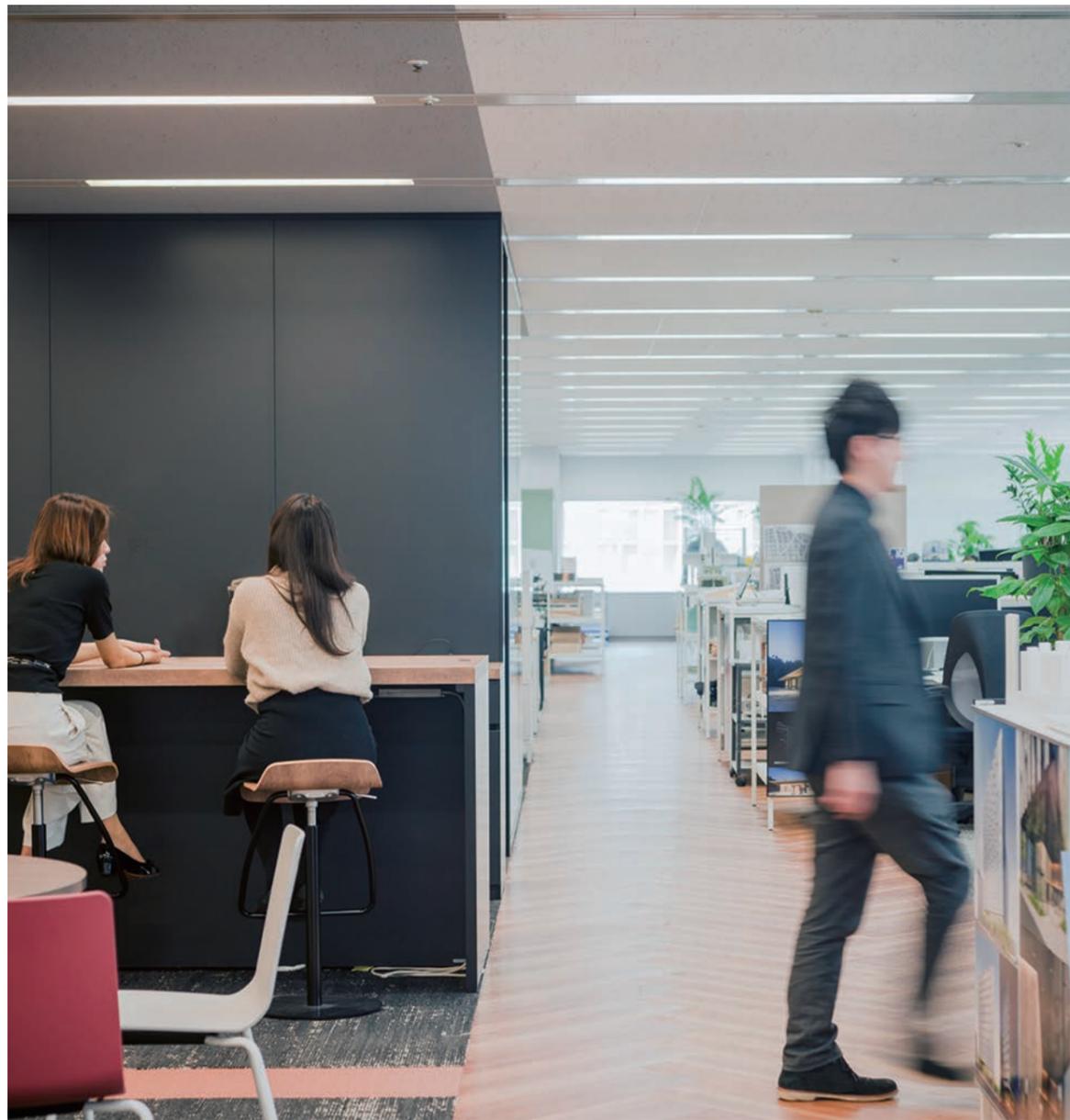
ARCHITORIUM

建築作品 - ARCHITECTURE
それを創り出す人、設計者 - HITO
その情報が集う場 - ATRIUM

ARCHITORIUM (アーキトリウム) は
大林組設計部の建築作品と
設計者を紹介します

ARC (Architecture) - Architectural works
HITO ("hito" means "person" in Japanese) - Designers, people who design the works
RIUM (Atrium) - Place where the information is assembled

"ARCHITORIUM" (a project name combining architecture, "hito (person)" and atrium)
offers a look at architectural works by Obayashi's Architectural & Engineering Division
and our designers.



Theme Happiness

幸せな空間とはなんだろう。

人の幸福度は創造性や、生産性に直結するといわれる。幸福度は内面心理だけでなく、居場所や環境から大きな影響を受ける。

そのため近年、Happiness、Well-beingなど様々なキーワードのもと、コミュニケーションを誘発する場や、方法、自然環境との共生、快適な居心地、居方などが研究されている。また新型コロナウイルスの影響により、コミュニケーションの取り方や人の居場所自体も大きく変化しつつある。'幸せな空間'とはどのような空間なのか。当社設計の建築作品や、ワークプレイスの紹介、ディスカッションなどを通して探っていく。

What is a happy place?

Happiness is said to have a direct bearing on a person's creativity and productivity. It is greatly affected by the environment as well as one's inner state. In recent years, using such keywords as Happiness and Well-being, research is being carried out on spaces and methods that induce communication, coexistence with nature, comfortableness, etc. COVID-19 has been greatly changing how we communicate and where we are. We will showcase the architectural works and workspaces we have designed, have discussions, and explore what "a happy space" would be like.

CONTENTS

04	Link+ What is a Happy Workplace?	小堀哲夫氏×大林組設計部 Architect Tetsuo Kobori and Obayashi's Architectural & Engineering Division
18	FEATURE-1 Happiness by Co-Innovation	日立製作所中央研究所 協創棟 Kyōsō-tō
26	FEATURE-2 Happiness by Lighting	東京医科大学病院 TOKYO MEDICAL UNIVERSITY HOSPITAL
32	WORKS-1 Happiness in the Street	新虎通りCORE SHINTORA-DORI CORE
34	WORKS-2 Happiness in Matière	理研計器株式会社 本社 Headquarters RIKEN KEIKI CO.,LTD.
36	WORKS-3 Happiness in Roofscape	万田発酵株式会社 HAKKO ゲート Manda Fermentation Co., Ltd. HAKKO Gate
38	WORKS-4 Happiness in Nature	ディスコ九州支店 Disco Kyushu Branch Office
40	HITO Happiness of Working in Thailand	タイで働くということ Takeo Iwaoka

Link+

What is a Happy Workplace?

Architect Tetsuo Kobori

and

Obayashi's Architectural & Engineering Division

Tatsuji Kimura / Chiharu Miki / Takuya Asanuma

moderator: Makiko Umeno



Happyに働けるワークプレイスとは？

建築家 小堀哲夫氏 × 大林組設計部

木村達治 / 三木千春 / 浅沼拓也 (司会: 梅野麻希子)

私たちはどう働きたいのか。私たち建築設計者はどのようなワークプレイスを創造すべきか。Happyに働けるワークプレイスの手掛かりを見つけるため、建築家・小堀哲夫氏と大林組設計部ワークプレイス改革担当者のディスカッションを企画し、2020年1月に顔合わせを行った。その後、期せずして新型コロナウイルスが世界中に広まった。Web会議・テレワーク中心の働き方へと急速にシフトした今、このウイルスがもたらした予期せぬ変化で設計者は何を考えるべきなのか。同年6月に意見交換をし、10月に対面ディスカッションを行った。これらの対話によって、私たちが目指すこれからのワークプレイスを探る。

(注) 本記事の英訳は、Wed版 ARCHITORIUM 内、JOURNALよりご覧になれます。(巻末に QR コード掲載)

How do we want to work? What kind of workplaces should designers create? To find clues, we planned a series of discussions between Mr. Tetsuo Kobori, an architect, and members of Obayashi's Architectural & Engineering Division in charge of workplace reform. The first meeting took place in January 2020 and then the COVID-19 pandemic struck. With a rapid shift to online conferencing/telecommuting, what do designers need to think about? We explored this "new normal" and will give rise to new ideal workplaces through opinions exchanged remotely in June 2020 and face-to-face in October 2020. Note: The English version of this article is available on the web version of ARCHITORIUM, JOURNAL. (Accessible from the QR code at the end of the volume)

小堀 哲夫 (こぼり てつお) 氏

1971年、岐阜県生まれ。1997年、法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程(陣内秀信研究室)修了後、久米設計に入社。2008年、株式会社小堀哲夫建築設計事務所設立。2020年、法政大学教授、梅光学院大学客員教授。2017年「ROKI Global Innovation Center -ROGIC-」で日本建築学会賞、JIA 日本建築大賞をダブル受賞。2019年「NICCA INNOVATION CENTER」で2度目のJIA 日本建築大賞。また ABB LEAF Awards 2018 Shortlist、BCS 賞、AACA 優秀賞など受賞多数。そのほかの作品に「昭和学園高等学校」「南相馬市消防防災センター」「梅光学院大学 The Learning Station CROSSLIGHT」がある。



COVID-19 Timeline

January 28, 2020
pp.06-09

Before COVID-19 | With COVID-19

June 25, 2020
pp.10-11

October 12, 2020
pp.12-17

ゼネコンだからこそできる働き方

木村達治 (以下、木村) 大林組の本社では鳥状対向配置の昭和型レイアウトが昔から続いていて、設計部としてクリエイティブな仕事には向かないという違和感をみんなが持っていたんです。そこで、設計部員が自ら動いて情報を集めにいき、他者と互いに情報発信ができるような空間に改修しました。フロアの長手方向中央にzipと呼んでいる通路を通し、その両脇に奥行きが浅くなった執務スペースと自由に利用できるオープンスペースを並べています。フロア中央のアトリウム沿いにはレビューコーナーなどの人が集まりやすいhubとなる空間を配置しています。中央の通路がジッパーとなって、hubやオープンスペースで起こる出来事を周囲に開き、またつなぎ合わせるようなイメージです。

浅沼拓也 (以下、浅沼) 東北支店設計部は30名程度が在籍していて、全員でワークショップを実施して意識を高めるところから取り組み

ました。生命や自然の要素を取り入れるバイオフィリックの考え方で素材を選び、規模が小さく空間的な自由度が少ない中でも豊かさを感じられるように工夫しています。

小堀哲夫氏 (以下、小堀氏) バイオフィリックといえば、観葉植物をオフィスに置くときにそれぞれの植物に世話係の名前を貼っておくと、世話の頻度が植物の鮮度に現れて世話係本人の元気のバロメーターになるんです(笑)。

浅沼 働き方を変えるには空間以外のデザインも重要ですね。

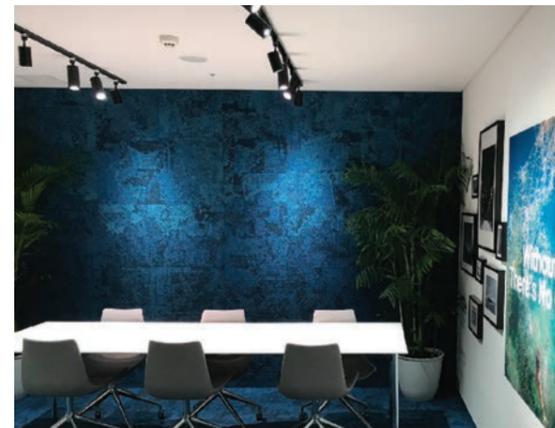
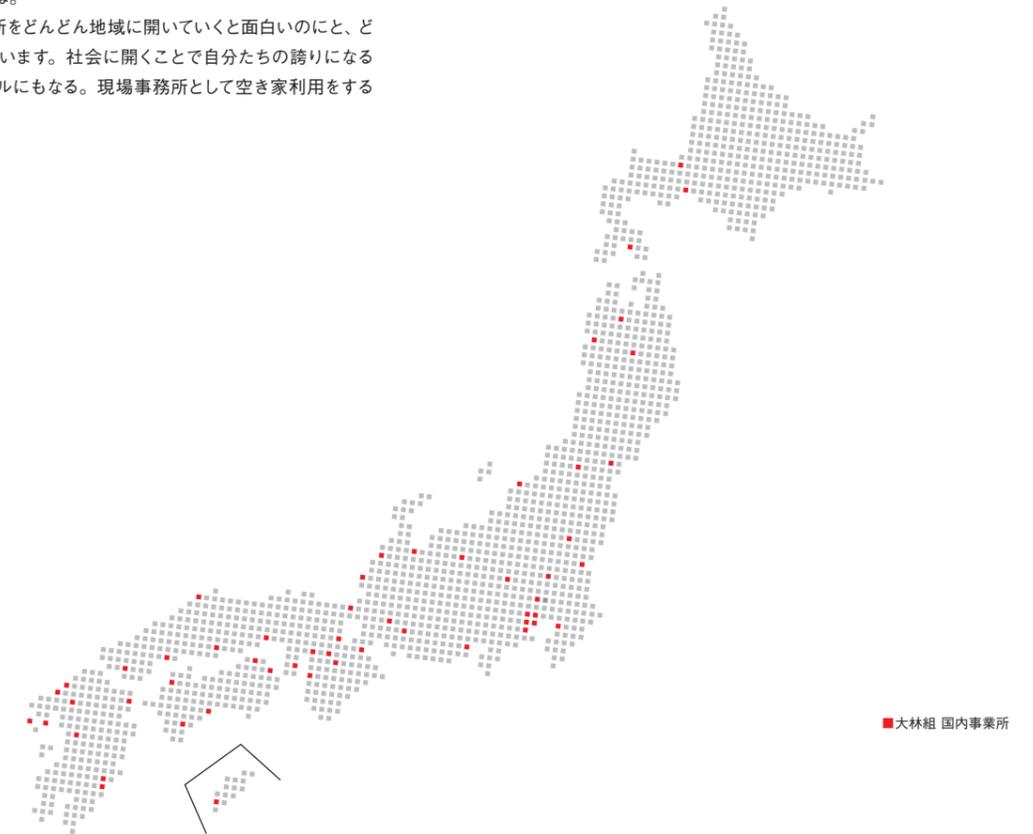
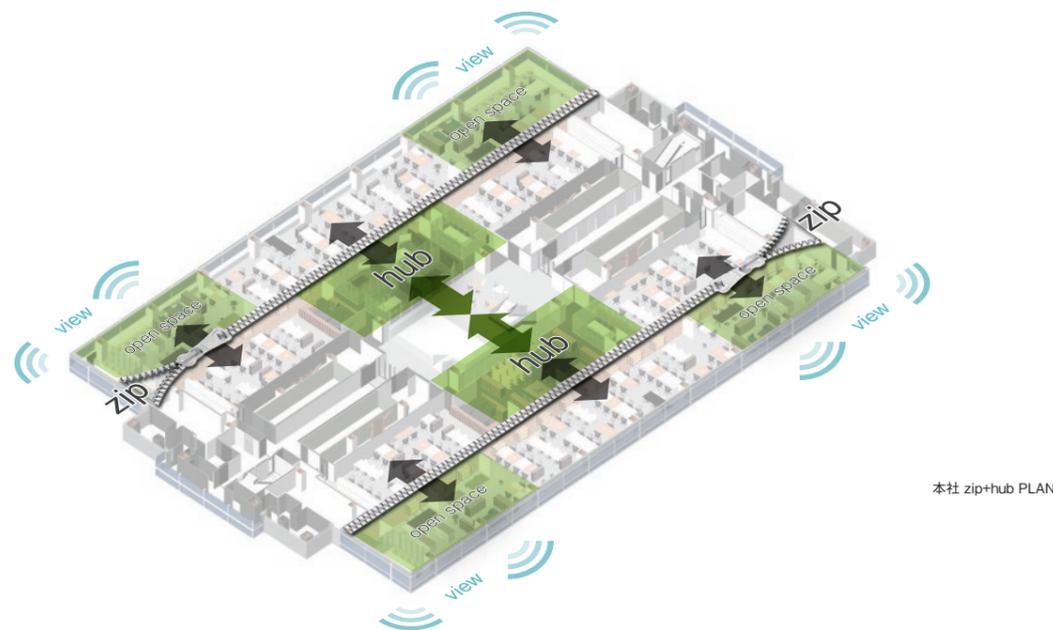
小堀氏 うちの事務所ではスタッフが集まって朝食を一緒に食べることにしていて、コミュニケーションが自然と取れるように工夫しています。これも「朝食」という道具を用いたデザインの1つです。

三木千春 (以下、三木) 大阪本店の設計部内で中堅にあたる30代後半の社員を集めて、「10年後にどう働いていたか?」と問いかけると色々な意見が集まりました。その中に「社内の意識改革が必要、

まず上司から。」という意見を受けて、部長の固定席を廃止してフリーアドレスにしました。実際にやってみると部長さん方がけっこう柔軟で、荷物や資料をすべて片付けて帰るので、頭が整理されて良いという意見や風通しが良くなったなど意外と好評でした。

今回の改修は設計部のみで行ったのですが、会社全体で考えると多様な働き方を考えられるなどと思います。当社はゼネコンなので現場事務所や営業所が全国にたくさんあります。たとえばそこをサテライトオフィスとして使うとか、ゼネコンとしての拠点の使い方を広げていくと面白いですね。

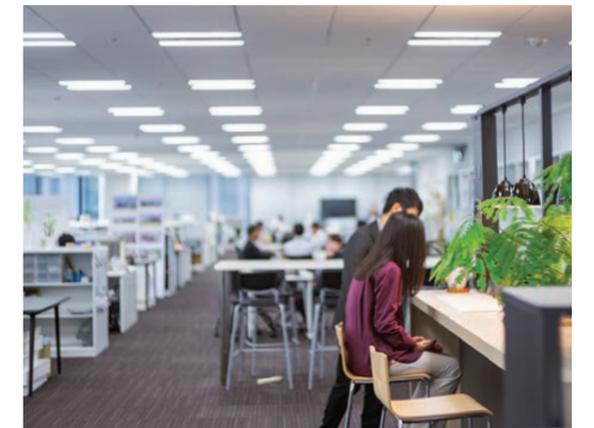
小堀氏 現場事務所をどんどん地域に開いていくと面白いのにと、この現場でも思っています。社会に開くことで自分たちの誇りになるし、対外的なアピールにもなる。現場事務所として空き家利用をするのもいいですね。



東北 Biophilic Design



本社 zip Road



大阪 Trial

Design by peopleの時代へ

梅野麻希子(以下、梅野) 小堀さんが設計された近作のオフィス建築が多くのメディアでも注目されています。ご自身で感じている手応えや印象的なエピソードはありますか？

小堀氏 2017年に新築した「NICCA INNOVATION CENTER」についてですが、日華化学の既存のオフィスに対して従業員から特に不満はありませんでした。そこで、まずは保守的な意識を打破するためにクライアント自身がどうなりたいか考えさせることから始めました。「プレイルシンキング」を提唱する同志社女子大学名誉教授の上田信行先生をお招きして「KDKH model」という「空間(K) 道具(D) 活動(K) 人(H)」の4つの考え方をういてワークショップを開催しました。結局、空間を用意するだけでは足りず、扱う道具や人の振る舞い、そして人自身が変わらなければプロジェクトはうまくいかないという確信を持ってました。

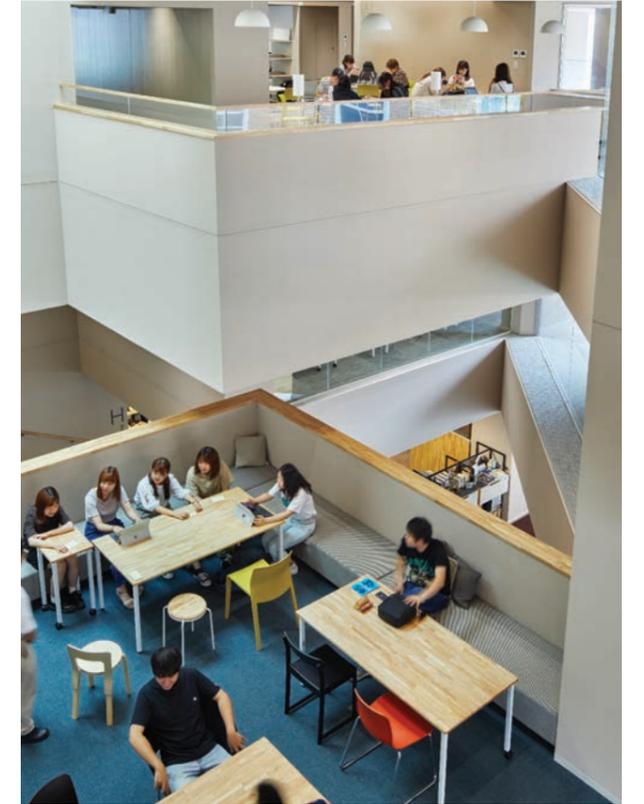
リズ・サンダースは2014年に「Design with people」を経て2044年には「Design by people」の時代が来ると提唱しています。これからは使い手自身がデザインするという感覚を育てる時代なのかもしれないですね。

三木 クライアントの中に入り込み意識改革から始め、最終的には魅力的な空間として完成させる、そのバイタリティに驚かされました。

小堀氏 相当消耗します(笑)。でも、「どう他人を喜ばせるかが設計」という思いもあって、大変だけど結果的にワクワクする空間を提供できると考えています。プロジェクトごとに色々学ぶことがあって、その都度目指す形は変わっています。梅光学院大学「The Learning Station CROSSLIGHT」(2019年)の設計では、学生が皆パソコンを持っている時代に、あえて大学内でコミュニケーションを取る意味はなんだろうと考えて、とにかく壁を設けました。



NICCA INNOVATION CENTER



梅光学院大学「The Learning Station CROSSLIGHT」



2020年1月、小堀事務所にて(左より)小堀哲夫氏 梅野麻希子 木村達治 三木千春 浅沼拓也

半径3.6mを幸せにできるか

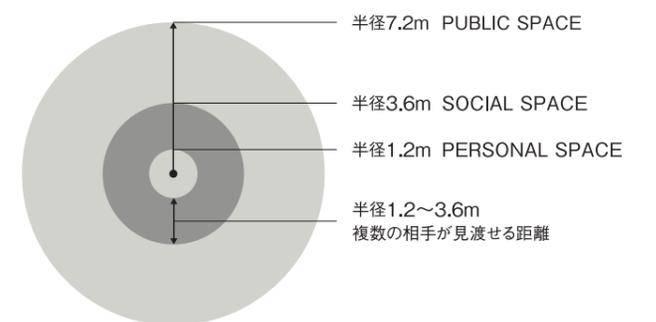
小堀氏 エドワード・T・ホールが「かくれた次元」(みず書房)から、分類した対人距離のソーシャルスペース、つまり自分を中心とする半径3.6mを幸せにできるかどうか鍵になると考えて、小さい空間を雁行させて人と人が交差する空間構成としました。個人研究室を無くして教授の持っている本はオープンに並べて借りられるようになっていきます。

浅沼 コミュニケーションをどうデザインするかを考える中で、3.6mというスケールは1つの指標になりそうですね。壁がたくさんあるということも、書棚やモニターを設置する使い方にとても適していると感じました。それでいて閉塞感が無く、色々なところが見える。

三木 大学の授業を他人が誰でも聞けるという状況に変えることはもはや改革に近いですね。本当にバイタリティがすごい…(笑)。こういう手法にたどり着いたきっかけはなんだったのでしょうか？

小堀氏 クライアントと密にコミュニケーションをとって設計するとすごく喜んでくれた経験がきっかけですね。建築模型もクライアントと一緒に作れば自分ごとのように楽しんでもくれます。建築を作る過程と一緒に体験して楽しさの味を占めてもらう。そうすると、結果としてできあがる建築もいいものになるという実感があります。

梅野 それこそクライアントや地域社会を巻き込んで建築を作る楽しさを共有できれば「Design by people」の時代に近づきそうですね。



エドワード・T・ホール「かくれた次元」

遊ぶ = 自由と創造の文字



「人が旗を掲げて外の世界へ行く」
= 神のみ

白川静 「遊の字源」より

仕事でなく「遊ぶ」という感覚

梅野 1月の顔合わせ以来、ようやく5ヶ月ぶりのWebミーティングとなりますが、コロナの影響で働きが大きく変わりましたね。コロナ前から社会的にワークプレイス改革の声が大きかったですが、今後はどう変わっていくのでしょうか。

木村 感染防止を最優先とするのか、感染対策は必要最小限として再び対面での執務を推進するのかによって違いが出そうですね。

小堀氏 不要不急なものとはにかくデジタルで解決して、急を要するものがフィジカルのまま残るといった流れが少しずつ顕著になってきていますが、不要不急といわれるけれど、個人が必要なものがけっこう大切だったりする。旅行とか、まさにそうですね。

木村 コミュニケーションでもその流れがありますね。私は家ととにかく居心地がいいのでテレワーク中心の生活は割と快適です。会社にいると声をかけられて面倒ごとが増えるし(笑)。でも、その会社での面倒ごとのおかげでうまくいくことも多いので、あえてストレスを受けに出社している節があります。

小堀氏 漢字学者の白川静がエッセイの「遊字論」で「遊は絶対の自由と、ゆたかな創造の世界である」と書いている。「遊」の漢字の成り立ちもモンゴルの開拓者が旗を振って進んでいる様子を表していて、僕たち設計者はそうやって旗を振って関係者を巻き込んでいくべきだし、これからはそんな「遊ぶ」感覚を持って仕事に取り組むことが大事になってくると考えています。

つなぎ方をデザインする

木村 今まではABW(Activity Based Working)、つまり1つの施設の中に多様な場を設けて働く場所を選べるような取り組みがありました。これからはその多様な場を1つの施設の中にもっと増やしていこうという流れになるのか、あるいは施設単体ではなくもっと広がりをもって多様な場を増やしていくのが気になっています。

三木 施設の中から外に出ていくことにも可能性を感じています。いわゆるサードプレイス、コワーキングスペースやカフェでも十分仕事ができちゃいますよね。

小堀氏 そういうオフィスの外の働く場を僕は「フィールド型」と呼んでいて、この先すごく大事な領域だと思っています。

その他に、1月にも話した「かくれた次元」で書かれているパーソナル、ソーシャル、パブリックのさらに外側の距離感として、デジタルな場を新しく獲得したと考えるようになりました。パブリックまでの場をフィジカルな距離感で色々選ぶというABWの考え方が、これからはデジタルな距離感も含めて働き方を自ら選んでいける世の中になっていく。いわばハイブリッドABWです。

浅沼 その新しい距離感はずごく共感できます。新幹線の中でも遠隔で打ち合わせに参加できたり、今までにないデジタルなコミュニケーションが当たり前になってきました。

三木 この2ヶ月間、Web会議と対面とで人間関係に大きな違いがあるなと思いました。Web上だと、対等というか横並びみたいな感じ

で、日本では会社での上下関係が確立されているけど、デジタルだと横のつながりを増幅させることになったんじゃないでしょうか。

小堀氏 これからはこの新しい距離感を積極的に使っていけると思っていて、同じデジタルでもテレワークは割とパッシブな使い方だけど、アクティブでデジタルな使い方に面白さを感じます。VRで現場を歩いたりとかゼネコンでも色々取り組んでいますよね。

三木 先ほど小堀さんが仰っていた「遊ぶ」という感覚が今の「アクティブ」という表現に重なりますね。誰かに命令されるのではなく、働く場所を自分で選んでいく。それがデジタルでもフィジカルでもどちらにも可能性がありそうです。

浅沼 どう働きたいかという明確な意思がないとアクティブになれませんね。以前小堀さんにお聞きした「Design by people」にもつながっています。

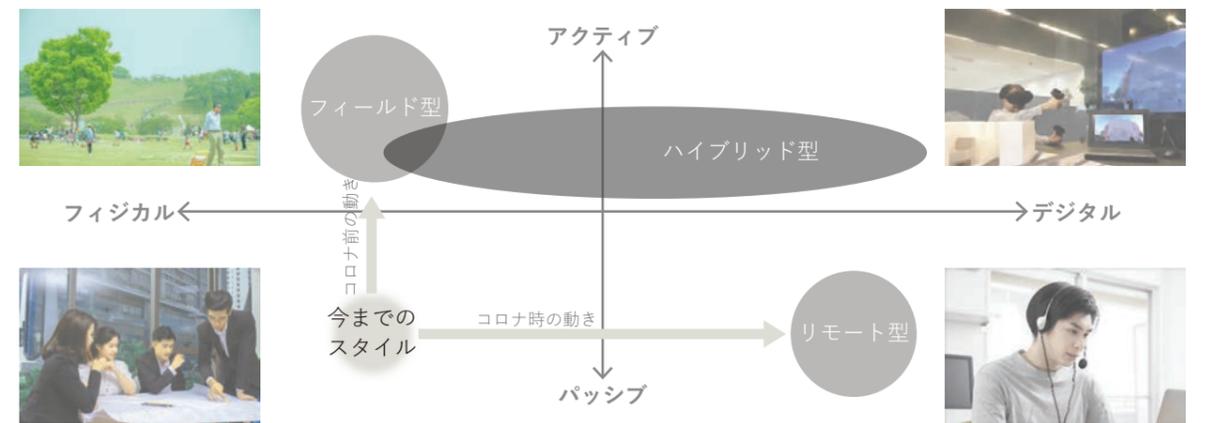
小堀氏 だからこそ、新しい距離感を覚えてバラバラになったアクティ

ブな人や場をどうやってつなぐのかという意識が大切だと考えるようになりました。これまでの「どう集まるか=コワーキング」でなく「どうつなぐか=コネクテッドワーキング」という考え方です。

木村 デジタル領域を拡張する手法はデジタルツールの設計に委ねられ、建築設計という職能を活かすことが難しく感じていましたが、コネクテッドワーキングで場のつなぎ方をデザインするところに私たち建築設計者の目指すべきヒントがありそうです。勤を働かせるためにもフィジカルなつながりが改めて大切で、まだまだ身体性に依存せざるを得ない。

浅沼 デジタルとフィジカルのバランスを取るということは、個人が適切に距離感を選んで働く場を決めることだと思います。そのためにはやはり多様な場が必要になりそうですね。

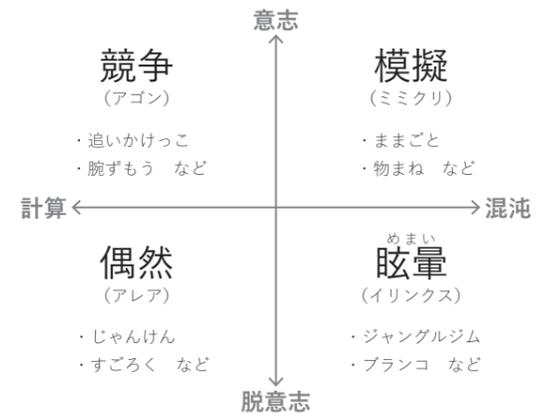
梅野 私たちが働く場所に求めている環境がどういうものなのか、改めて今日のWebミーティングで少し見えてきました。次回はフィジカルな場を予定しているので、また違った議論が期待できそうです。



コネクテッドワーキングによる手法 ABW(Activity Based Working) 多様な居場所と形態で自ら働く



2020年6月、Webミーティングにて(上段左より) 木村達治 小堀哲夫氏 (下段左より) 三木千春 浅沼拓也



ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』より「遊びの4類型」

多様なまま存在する美しさ

梅野 1月の顔合わせ、6月の意見交換を経て、10月となりました。今回の会場は、虎ノ門ヒルズビジネスタワーの15、16階にオープンしたケンブリッジ・イノベーション・センター東京（以下、CIC Tokyo）。CICと小堀さんが共同でオフィスプランニングを手がけられました。

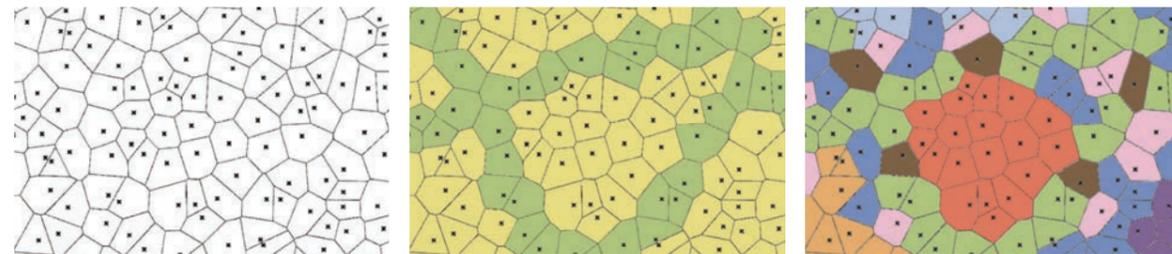
小堀氏 CICはボストン発祥で、世界9都市に展開しています。アジアでは東京が初進出。最初、CICからは「多様なまま存在する場所、均一ではない場所」というテーマが挙げられました。均質ではないものをどう作るかを議論し、多様なまま存在する美しさとは何かを考えて、細胞をつなげた生命体のような場にしようと思いました。

三木 今日、初めて中を歩いてみたのですが、どこを歩いても部屋や通

路の雰囲気が一一つ全部違うし、入り込んでしまうと方向感覚も失われる。でも落ち着くという印象もあって、不思議な気持ちになりました。

小堀氏 15階はボロノイグリッドを用いた部屋割り、通路も路地裏のよう。16階はバリみたいに目抜き通りがあって、都市空間のようになっています。居心地のいいところを探して集ごもりする感覚も働く場として必要だと考え、外に出ればパブリックだけど部屋の中は自由にできる、そういう場の集合体を創りました。CICの人たちは遊ぶように働いていて、だけど真剣。僕らが生命体をイメージしたコンセプトを打ち出すと、面白がってチャレンジしようと言ってくれました。働く場所にはゲームも必要だと言って、そういう精神を持って働くのだと教えられました。

浅沼 遊びを通して、信頼感をつくっていくんですね。



生命体のような場を生むボロノイグリッド

かくれんぼで空間を知る

小堀氏 CICの人たちには驚かされることばかりでしたが、CIC Tokyoができてすぐ、彼らが何をしたかわかりますか？

三木 鬼ごっこか？

小堀氏 惜しい！かくれんぼをしたんですよ。普通は図面を見ながら部屋の仕様をチェックしますよね。彼らは、かくれんぼを三日三晩やったら覚えるんじゃないかと思っただけ。実際、三日くらい連続してかくれんぼをして、どんな部屋があるのか、どの部屋がどの通路につながっているかを、遊びながら覚えたようです。「空間を知る」ために何をするか。この場所の特性を知るために、遊びのスイッチを入れるんです。遊びの環境を創って楽しみながらやるのは賢い方法だだと思います。

木村 その意識の転換ができるのが素晴らしいですね。

小堀氏 仕事も受動的にやるとネガティブになっちゃうけど、ポジティブに遊びの要素を入れていくと非常に効率上がるでしょうね。彼らはつなげるプロフェッショナルでもあって、各国から多様な人が来て言語も3ヶ国語くらいは平均でしゃべれる人たちが集まっている。その多様な人が多様な人をつなげていく力を持っています。人と人のつながりをもたらすことでどうやって文化を新しくつくっていくかが、これからは大事になっていくでしょう。

浅沼 そういった感覚が浸透していくといいですね。

偶然と眩暈を生むフィジカルな空間

木村 1958年に出版された、『遊びと人間』（ロジェ・カイヨワ著、講談社学術文庫）では「遊び」は4つに分けられるといわれています。競争と模擬は意志的な遊びで、偶然と眩暈（めまい）は脱意志的な遊びにあたります。オンラインでの会議は意志的なもの。でも空間の中で思いがけず起こること、たとえば偶然の出会いや雑談だったりなどは、デジタルでは意外とできていない。梅光学院大学やこのCIC Tokyoなど、小堀さんが創られた場所には、偶然と眩暈の2つがうまく盛り込まれているなと思いました。今、こういう場所をリアルな場で創るのは意味がありますね。フィジカルな空間じゃないとできないことが多いです。

小堀氏 眩暈って面白い概念ですね。たとえば僕らで言うと、設計は積み上げていく作業だけど途中でとつともなく面白いアイデアが出てきたときに、それをリスクととらえるか、ポジティブにとらえるか迷いませんか。ある程度、作業が進んでからだと今さら言えなかったりしますが、遊びの世界だと肯定されるけど仕事の世界で肯定されるかはわからない。

三木 チームで仕事をするとき、何を言っても許してもらえという信頼があるのとないのでは全く違いますよね。もっと広がってもらえるかもしれないという信頼感と安心感があれば意見を言いやすいチームの雰囲気になりそうです。

建物だけでなく活動をデザインする

小堀氏 日華化学では、定常化しないために何度もワークショップをやりました。イノベーションを起こす、新しいことをやろうというマインドと空間を、セットでどうやって考えていこうかと。

三木 小堀さんが創られた空間にも感動しましたが、設計者と使う側の意図が理解し合っている方がいいなと思いました。それは使う側に「こういうふうに使ってもらうために創ってもらったから、こう利用しよう」といった感覚がないと、生きた空間にはなりません。せっかく場所を創っても継続していけないのは悩ましいですね。小堀さんと上田教授と一緒にやったことで、日華化学の社員さんの意識改革が同時に行われたんだと感じました。

浅沼 以前にもお話しされていましたが、クライアントの中に入り込んだ意識改革ですね。

小堀氏 設計者がそこまでやるのかという意見もありますが、また、ハードを創って活動をデザインしても、その場や関係性をかき混ぜる人が一緒に育っていかないと活用されません。日華化学の場合はワークショップを8回やって、そのメンバーがイノベーション企画部の運営を始めた。その人たちを中心に、各部署の社員が新たな見学人を案内して「この場所はこういう意図で創られた」と説明するようになりました。これは感動しました。

三木 社員さんたちの熱意があったうえで、会社がその熱意に対して後押しをする。それは広報活動としても意味がありますね。

必要なのは「かき混ぜる人」

木村 「かき混ぜる人」の話が出てきましたが、今まさに大阪でかき回すことをやろうとしています。

三木 当社は社員が8800人いて、そのうち大阪本店は2500人程で、さらにその中で1500人くらいが大阪の工事事務所に在籍しています。大阪本店のオフィス改革をすることになって、2019年末ぐらいから若手メンバー24人が集まって、どのようなオフィスにするかというプロジェクトチームを立ち上げました。彼らが最終的にまとめたコンセプトは「FAN&FUN」。

浅沼 設計者だけでなく、色々な部署から集まったんですね。

三木 最初はあまり話もはずまなくて、とりあえずオフィスへの文句を言っていた程度。でも少しずつ自分たちで考え始めて、「私たちが何かしないと会社って変わらないよね」と自分ごと化していきました。難しい顔を議論を重ねていたのが、今はけっこう楽しそうにやっています。

小堀氏 写真を見ると、みんな生き生きしていますね。

三木 彼らが最終的にプレゼンしたのは、オフィスのレイアウトではありません。横をつなげる人、いわゆるワークファシリテーターが部署として必要だということです。確かに横をつなぐ部署はなく、ワークファシリテーターが社内の人やチームをかき混ぜていく、その役割があったほうが何か生まれそうだと。日華化学で小堀さんがされているように、空間以前に仕組みから考えようと提案するに至ったことは、面白いと思いました。



もっと楽しめないといけない

三木 大阪本店では社員がコロナを体感して「どこでも継続できる働き方」のスキルを身につけて、その上でオフィス空間に必要なものは何か、ということに彼らに使い方も含めて意見を求めています。私自身は設計を担当している設計部と施主としての総務部をつなげる立場にいて、そのおかげで気づいたことがあります。こんなに優秀な人がたくさんいるのに社員でも知らない人が多くて、総務の役割もこれほどたくさんあったのかと。お互いコラボレーションしたら、もっと面白いことができるんじゃないか、それを肌身で感じました。組織に横車を刺すことについて会社が労力や空間を用意すると、CIC Tokyoのように社内でもコラボができて、別の世界が広がるはずだと。

浅沼 三木さんが総務部を兼務して設計と総務をつなげ、横に串を刺してくれています。

三木 色々な部署に「働き方を変えない？」って声をかけています。そういう提案をすると興味深く乗ってくれる人がいて、うちの会社も結構面白い人いるんだとわかりました。楽しくやろうと思えば、仕事は楽しくできる。もっと楽しめないといけないですね。

小堀氏 そういう時は、どれだけ自分で鍵を持っているかが大事。色々な部署の鍵を持っていて、いいネタを仕入れてそれをつなげていく。大企業も1つの都市空間ですね、色々なところから人が来ているわけだから。それをちゃんとデザインできる人がいて、面白い人同士を

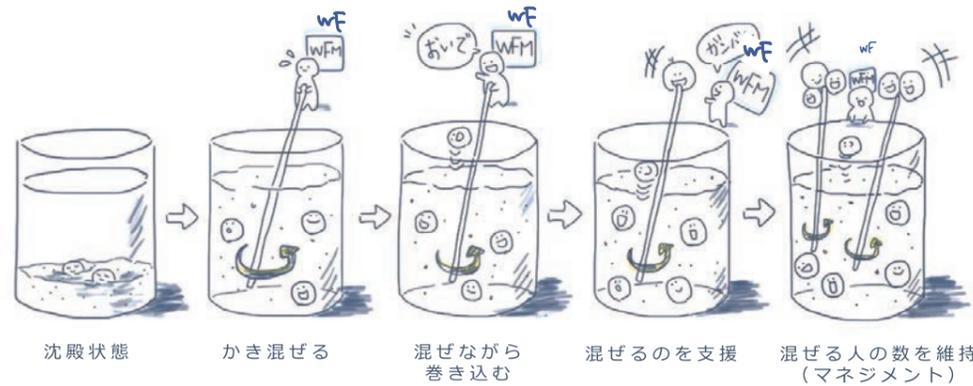
つなぐ人が重要なんです。日本人は発信が下手なので、個々のスキルを受信してつなげていく人を頼るか、もしくは自分で発信するかのどちらかを積極的にやっていったほうがいいでしょう。

三木 個々の能力をそうやってつなげることで会社の生産性や成長率が120%、150%になるなら、会社をかき混ぜるプロフェッショナルを雇ってもあまりあると思います。その気持ちは今までの日本企業にはなかったのでは。

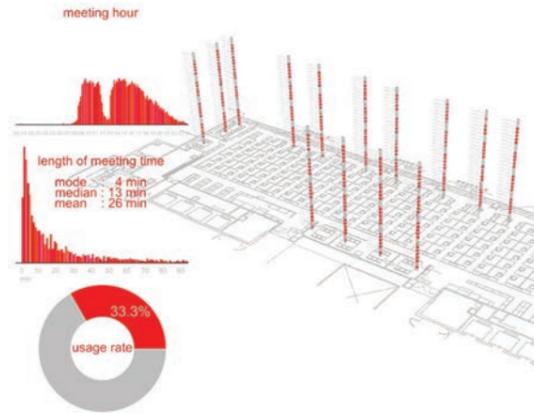
浅沼 それが遊びのマインドにぶつけられて、また進化していきそうです。

三木 コロナ禍で、価値観が変わらなくてはならないとみんなが思っています。この思想が浸透してそこに人やお金をかけなくては思っているなら、日本の企業はもう少しアップするかもしれないという希望があります。

小堀氏 労働という言葉はネガティブにとらえられてしまいますよね。もともとは、住むのと働くのが同じ場所だったのが、次の時代に外に働きに出るようになって、それがまた自宅働くようになって、今はその第3の価値観ができました。わざわざ働くために外に出なくてはいけいなら、そのための新しい価値観をどうやってつくっていくか。人がいる、プロジェクトがある、仲間がいる、チームがある、そういうオフィスの場所性のリデザインを徹底的にやれば企業はもっと強くなると思います。



「FAN&FUN」のコンセプト「Work Facilitate」



IoTセンサーを用いた品川本社の打ち合わせテーブル利用率の可視化



(上)フリーアドレス化によるオープンなコミュニケーション
(下)東北支店設計部フロア中央のテーブル

タコツボとフリースペース

木村 品川本社はレイアウト変更で閉じた会議スペースを減らしたのですが、変更後にアンケートを取って見たら、会議室自体が減ったのに、会議室の空きを探す機会が減ったと回答がありました。今まではオープンスペースが貧弱だったので、数少ない会議室をわざわざ予約して打ち合わせしていたわけです。オープンスペースを使いやすく創ったら、そういうところで気軽に打ち合わせできるとわかったんです。

浅沼 上司の近くにオープンスペースがあるだけだと、みんなそこで打ち合わせしたがるんです。

木村 どんどん隙間を創っていったらデータ上でも立ち話の量が2倍に増えました。空間をどう作るかでコミュニケーションは劇的に変わります。今までタコツボ化していた上役の席ですが、片付けたら気持ちが違って「思い出は捨てて、クリエイティブな未来をみんなで創り出すスペースへ」と言い出しました。自分は今まで大量の書類と思い出に囲まれていたけど、それを捨てたら自席にとらわれない働き方の快適さを実感したみたいで。

三木 まず自分の城を捨てたら見えるものがあるかもしれないから、とりあえずクリアデスクにしたほうがいいと話しています。

小堀氏 僕のオフィスでも第1回席替えドラフト会議をやって、スタッフに希望席を言ってもらいました。人気がなさそうな電話に近い席も埋まって、みんなリセットしたかったんだなって。場を固定化しないで動かしてみるのもいいなと。

梅野 東北支店でも、レイアウト変更で面白い効果がありましたよね。

浅沼 東北支店設計部はワンフロア丸ごとレイアウト変更しました。自然の要素を取り入れると幸福指数が上がるということで、以前にお話ししたようにバイオフィリックデザインを入れて。タコツボがほしいという人もいたので、半タコツボということで実際にファミレス席を設け、様々な場面で使っています。

梅野 真ん中には大きなテーブルもあるんですね。

浅沼 会議も食事もできるようにして、奥の85インチモニターにはプロジェクトを流し続けて、企画やアイデアがインスパイアされることを狙っています。改修前は、個人のデスクがパーティションが高くして書類の山。20年くらいそのままだった人もいましたが、だいぶ雰囲気が変わってファミレス席もよく使われています。ただ僕が東京に異動になったタイミングでコロナが広がって、飛沫感染を防ぐためにデスク間のパーティションが復活したそう…。かき回す人がいないと、元の価値観が復活してしまうんだと反省しています。

木村 1回変えただけだとどうもくかないところもあるので、品川本社は継続的に変えていこうと思っています。今年はコロナもあって3密を避けるために部分的にフリーアドレスにして、偉い人も若い人も混ざって仕事をする環境にしました。偉い人ほど会社にはいないこともデータ上でわかったので、そのスペースを有効活用すればみんながHappyになれるはず。ボス席の在り方が会社の在り方を変え、ワークプレスの開かれ方や組織の姿勢を大きく左右します。

三木 大阪も部長以上をフリーアドレスにしたら、部長と部員、また部

長同士のコミュニケーションが増えました。9割以上がやってよかったと回答してくれています。

浅沼 フリーアドレスだと、毎日ピクニック感覚でどこに自分の陣地を作るかという気分になります。今まではあまり気に入っていない自分の秘密基地にこもるような気分だったけど、今は見晴らしのいい公園に変わった。そんな意識になりました。

ちなみに大林組が設計した日立製作所中央研究所 協創棟(本誌掲載 pp.18-25)は、ABW(Activity Based Working)の資質を取り入れて創られましたが、有効活用していただくために人の意識をどう変えるかという課題をシステムで解決したのは特筆すべきこと。空間・道具・活動・人を同時にデザインしていくことが必要ですね。

信頼関係が Happiness をもたらす

木村 Design by peopleという話につながりますが、「Mismatch」(キャット・ホームズ著 / Gildan Media 刊)の中に「We are all designers」という言葉があります。その中で「自分が心地よく感じることは無自覚のバイアス(=排他性)が含まれる」としてインクルーシブデザイン(包括性のデザイン)を実現するための指針が示されています。

小堀氏 なるほど。無自覚のバイアスってどうすれば自覚できるんでしょうね。

木村 ここで Design by people が効いてきます。自分は自分の嫌なことがわかる。他の人はその人の嫌なことがわかる。そこで by people でみんながつながってデザインをすることで、みんなにとって何を解決しなきゃいけないかわかる。自分の問題と他人の問題を解決して広げていくと、インクルーシブデザインにつながるなど。

三木 やる気スイッチを探して問題意識を共有することが大事で、何も問題がないよねと言っている間は何も生まれませんよね。

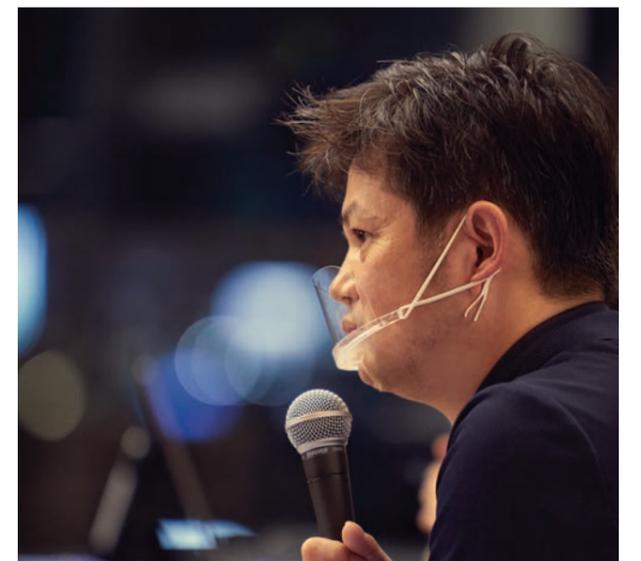
小堀氏 信頼感が満ちている場であればみんなが言い合えるけど、そうじゃない場所だと貝のようになってしまふ。言ってもいいよねという環境を創ってあげて、お互いに問題点や排他性を認識して、みんなでどうしようかと言い合える感じになると非常にいいかもしれません。

梅野 そこには環境、場の力が効いてきますよね。

木村 「Happyに働けるワークプレイス」をより突き詰めていくと、そういうことになるのではないですか。



(左より)梅野麻希子 小堀哲夫氏 2020年10月、CIC Tokyoにて
木村達治 三木千春 浅沼拓也





FEATURE-1

Happiness by Co-Innovation

日立製作所中央研究所 協創棟
Kyōsō-tō



うろうろと探検したくなるワークプレイス

人と人が面と向かって会話をする機会は、ITの普及により徐々に少なくなってきた。そこで我々設計者は日立製作所とともに、改めてコミュニケーションの大事さに注目し、自然と出会いが生まれるような場づくりを行った。QoL(クオリティ・オブ・ライフ)を向上させることに継続的に取り組んできた事業主だからこそ実現できた、心地よい研究空間である。

室内には、視界を遮る壁はほとんどなく、開放的な空間としている。建物の中央にはすべての階をつなぐ吹き抜けを設け、ゆるやかで幅の広い階段を設けた。そこでは、ちょうど立ち止まりたい場所にイスとテーブルが置かれていたり、良い香りのコーヒーを飲めるキッチンカウンターがあったりと、自然とうろろうとしたくなる仕掛けがちりばめられている。様々な分野の研究者やデザイナーが、ちょっとした立ち話から気付きを得て新しい発見を生み出すことのできる、仕事が楽しくなるようなワークプレイスを目指した。

A Workplace to Wander and Explore

With the popularization of IT, there are fewer opportunities to converse with others in person. That was why we, with Hitachi, Ltd., created an environment that encouraged communication and new encounters. The result was a comfortable space for research that was enabled because the employer has consistently undertaken the improvement of people's quality of life. It is an open space with few walls that block views. Wide, low-rise stairs and an atrium, in the middle, connect all floors. Chairs, tables, kitchen counters that offer aromatic coffee, and other features were strategically placed to invite people to wander around. The goal was to create a workplace where researchers and designers from various fields can get inspiration through chatting, make new discoveries and enjoy their work.

歴史ある豊かな森とともに

床に落ちる木漏れ日、窓から見える景色、日々同じものはなく自然の移ろいを感じることができる。この研究所の敷地である22haもの広大な武蔵野の森は、創業社長の“よい立ち木は切らずに、よけて建てよ”の言葉を受けて、今なお2万7千本の樹木が残り、野川の源流となる清水も湧いている。

この創業から培った豊かな環境を大切に受け継ぐため、新しい建物はもともと建っていた古い建物と同じ位置に創った。これにより樹木を極力伐採しないで済む。それにより建物も環境の恵みを十二分に受けることのできる共生関係をつくることを目指した。建物を1つの大きな塊とするのではなく、ボリュームを複数に分け、ずらしてつなげ、武蔵野の森をボリュームの狭間に取り込む構成とした。さらに、自然換気窓や吹き抜けを活用した換気システム、太陽光発電など森の光や風の力を借りた、エコロジーなシステムにより心地よい環境を生み出している。

Together with a Historic Rich Forest

The laboratory sits inside the Musashino Forest, a 22-ha virgin forest in greater Tokyo. The sun filters in through trees, and lush, natural scenery, that changes with each season, spreads outside its windows. The founding president gave instructions to avoid cutting good trees when building. Roughly 27,000 trees and shrubs remain, together with a spring that is one of the sources of the Nogawa River. Protected since founding, the number of trees to be felled have been minimized by constructing new buildings where original buildings stood. The goal was coexistence with nature, in which the buildings receive the blessings of the environment. The structure is dispersed into smaller, staggered, and connected units that fit into the open spaces of the forest. It is a comfortable working environment with ecological systems that utilize the sun and the wind in the forest through natural ventilation windows and atriums, and solar power.



新しいアイデアを生み出す開かれた場

持続可能な社会を生み出していくには、グローバルで複雑になった社会問題を解決する新しいアイデアが必要とされる。そのためこの研究所では、日立製作所の持つ最先端の技術と、外部の様々な研究者の考えを合わせ、実践する取り組みを行っている。ライブラリーとカフェを併設した開放的なオープンスペースや、自由度の高いガラス張りのラボ、社外のパートナーに一定期間滞在してもらい、共同研究を推進するための環境を設けている。ここでは、研究者を集めた勉強会や試作品づくりが自然に活発に行われ、日々新しい価値が生まれ続けている。

Open Spaces for Generating New Ideas

New ideas that will solve complex, global challenges are needed to create a sustainable society. To enable this, the laboratory is bringing together and implementing Hitachi, Ltd.'s cutting-edge technologies with the ideas of various external researchers. Spaces that can be used freely by such researchers have been created. They include an open space with a library and café, and glass-walled laboratories. Researchers gather spontaneously for study sessions, and prototypes are actively produced. New value continues to be created with each passing day.



笑顔で働く環境を働く人たちでつくる

設計をして建物を完成させ引き渡した後に、どのように使われているかが重要である。しかし、それらを定量的に評価できる機会はあまりない。そこでこのプロジェクトでは、建物が使われ始めた後も継続して、幸せに働く環境をつくり出すための取り組みを行っている。日立製作所と大林組が共同で、ワークスタイル変革実証実験^{※1}を行った。ウェアラブルセンサーによりこの建物を利用する人の行動データを分析。その日の作業に合わせて作業場所を提案するなど、生き生きと働ける仕組みづくりに継続的に取り組んでいる。自分たちがどのように心地よい環境をつくり出していくか、日々考え様々な工夫を続けていくことで、本当に笑顔で働くことのできる場所が実現できるのだと実感している。

Workers Creating Happy Workplaces

Of importance is how a building is being used after handover, but few are the opportunities for quantitative evaluations. This project continues even after handover to create happy workplaces. With Hitachi, Obayashi implemented a demonstration test of work style reform^{※1}. Worker behavior is being analyzed using wearable sensor data. Efforts to develop a system for working with vigor still continue, such as by proposing where people will carry out that day's task. We are seeing that happy workplaces can really be achieved by thinking and making various efforts on a daily basis to create a comfortable working environment.





*1 ワークスタイル変革実証実験：「協創の森」の成長のために
働く場所を整備しただけでは従来の働き方を変えることは難しい。社員の働き方
が見える化し、前向きで創造的なワークスタイルを根付かせるためのプロセスが必要
だ。本実験では、まず移転前と移転後の状況を調査・測定・分析し、その結果
をもとに施設を有効に活用してもらうための働き方や働く場所を提案する「オフィ
ス活用支援アプリ」を開発した。
「今日はテラスで論文を書いたら？」など、その日の作業に合わせた作業場所や行
動が、アプリによって提案され、その提案された行動を実行するとポイントを獲得
でき、楽しみながら新しい働き方を試すことができるゲーム仕立てとなっている。
これを繰り返し、どの作業にはどこが最適か、場所を知るにつれ、行動やマインド
に変化が生じた。実験結果として、67%の執務者が業務に合わせてエリアを移動
するマインドを習得し、会話人数が30%、滞在エリア数が86%増加するなど、マ
インド、行動両面において効果を確認した。

なお本プロジェクトは、日立建設設計+日立製作所研究開発グループ、イトーキ、
サワダライティングデザイン&アナリシスとの共同設計です。

*1 For the Growth of the "Kyōso-nō-Mori" – Demonstration Test of
Work Style Reform

Work style reform requires more than workplace improvement. Work styles
must first be made visible. New, positive, and creative work styles must then
take root. The test studied, measured, and analyzed the states before and
after the office move. An app was then developed to assist the effective
utilization of facilities. "Why not work on your paper on the terrace?"
the app might suggest, proposing places and actions for that day's task.
Designed like a game, the app awards points if suggestions are followed. It
offered a fun way to try out new ways to work, and as people got to know
the best places for specific tasks, changes were seen. As a result, 67% of
workers were changing locations according to the task. There was also a
30% increase in people workers conversed with, and an 86% increase in
where they spent their time.

This project was designed in conjunction with Hitachi Architects &
Engineers + Hitachi, Ltd., Research & Development Group, ITOKI
CORPORATION, Sawada Lighting Design & Analysis Inc.



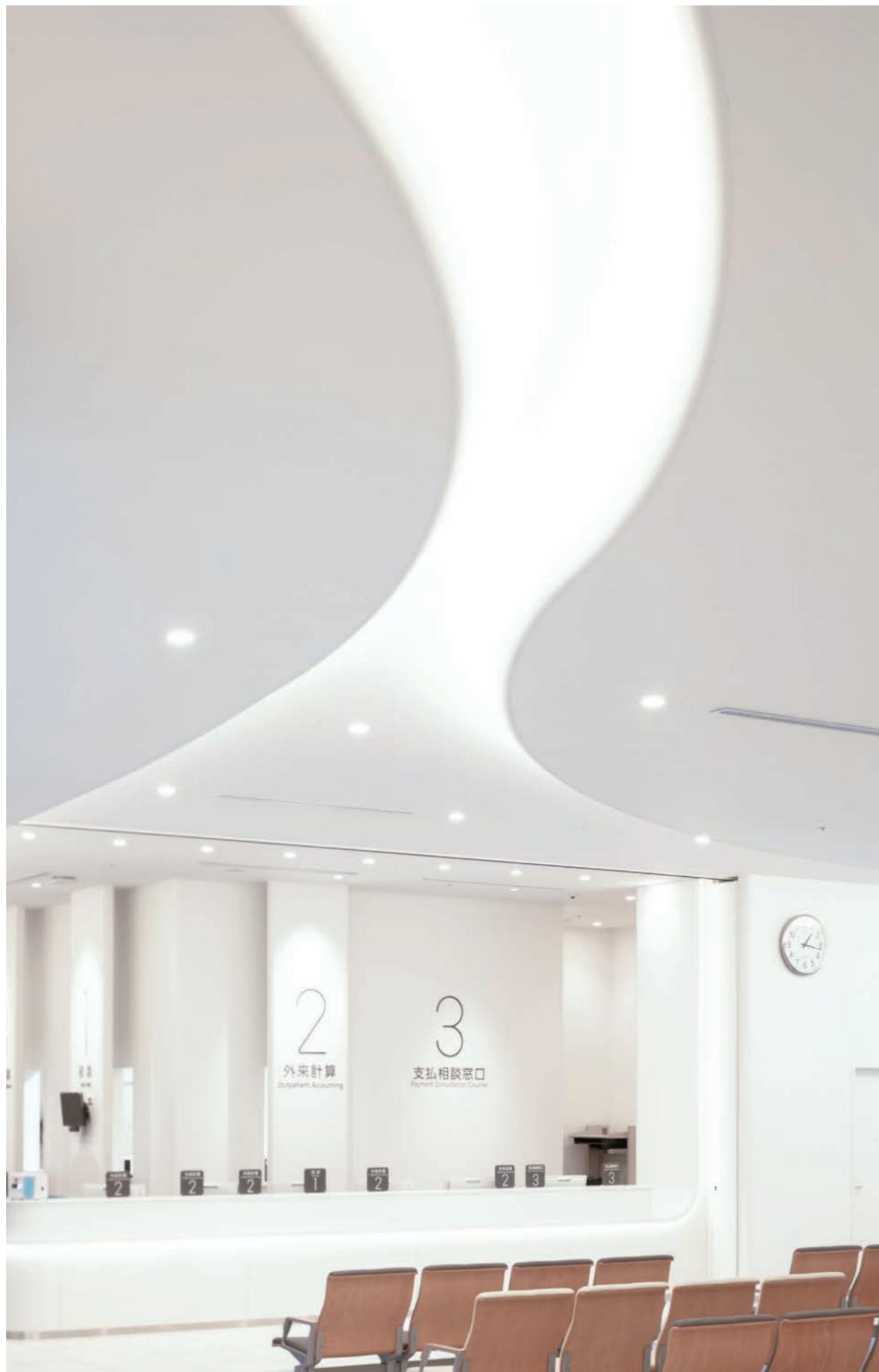


FEATURE-2

Happiness by Lighting

東京医科大学病院

TOKYO MEDICAL UNIVERSITY HOSPITAL



前を向いて歩くために

自分や親しい人が病気から立ち直ることができるかどうか。不安を抱えながら過ごす病院において、少しでも気分が安らぎ、前向きになれるような空間とはなんだろう。

多くの診療部門が集まる総合病院で、慣れない人はどこへ行けばいいのかわからず、その迷いが不安を煽る。そこで、目的地となる場所に導いてくれるやわらかな光を天井に巡らせた。人々の心の拠り所を照らす光が、病棟フロアでは病棟ステーションを包む光のリングとして、外来フロアでは受付へと流れる光の川として、患者や来訪者を導く。それは行先表示のようなあからさまな表現ではない、角を出さない丸みを帯びた壁や天井のディテールによって、光はやわらかな印象となり、自然に導かれるような感覚を与えてくれるだろう。

1階の外来フロアには3層吹き抜けの「ひかりの回廊」があり、高い天井を活かして心が解放されるような空間を設計した。しかしここは西新宿の高密度地域にある大規模病院であり、最先端の病院機能を持ったフロアが幾重にも積層されているため、吹き抜けを天空まで穿つような空間の余裕はない。そこであたかも陽の光のように時間によって光の強さや明るさが変化する照明で天井全体から吹き抜けを照らした。人々が抱える不安や、これまでの病院の閉鎖的なイメージを、明るく包み込む光で浄化した。

For Moving Positively

A hospital is often a place where people feel anxiety, wondering if they or their loved ones will be able to overcome an illness. The goal, here, was to create a comforting space that could help people feel positive. It is easy to get lost in a general hospital with its many clinical departments, and that can increase a person's anxiety. Thus, soft lights were placed on the ceiling to help people find their way. On the ward floors, the lights form a ring that surrounds the staff station. On the outpatient floors, the lights create a river that flows to the reception area. Unlike sharp, angular written signs, the curved details on the walls and ceilings help give the guiding lights a soft, welcoming impression that naturally guides people to their destination. The first floor (the outpatient floor) has a "Light Corridor," with a three-story-high ceiling to help people feel liberated. Being a multi-floored, large-scale hospital with state-of-the-art facilities in a high density area of Nishi Shinjuku, Tokyo, there is not enough space to open up the ceiling to the sky. However, the lighting around the atrium changes in brightness and intensity as the day passes, mimicking the changes in the sun's rays. Light erases the conventional closed impression of hospitals and eases the anxiety that can be felt.



街とつながる待合空間

大きな病院はとにかく待ち時間が長い。その長い時間を待合廊下でひたすら座り続けて過ごすことで不安と緊張が募る。それはまるで日常から隔離された別世界に閉じ込められたかのように。

しかし、この病院は待合廊下が街に面している。街中で休憩している日常の一部となるように、開放的な一面ガラス張りの待合空間とした。青梅通りを行き交う車や人、天気の違いや移り変わりなど、長い待ち時間でも不安を忘れて、ぼーっと一日の時間の流れを感じられるおらかな空間で診療を待つ。

そしてその待合空間は外から見た病院の印象を劇的に変える。ガラス越しに見える人々のシルエットが外観に生き生きとした動きを与え、日が暮れると待合空間の照明が街の明かりとなって温かい雰囲気を演出する。地域の中核拠点として、人々に安心感をもたらす病院の在り方を表現した。

Waiting Areas Connected to the City

Long waits are a part of the general hospital experience. Staying sitting in waiting areas can increase anxiety and nervousness, as if you are trapped in another world. This hospital's waiting areas, however, face the street, and the glass walls make patients feel like they are taking a break on a bench. Gazing outside at the weather or watching the world passing by can help people forget their anxiety during the long wait. The waiting areas also dramatically change the impression of the hospital as seen from the street. The silhouettes of the people within add lively movement to the exterior façade. After the sun sets, the interior lights become a part of the cityscape, giving it a warm glow, and expressing the comfort that the hospital gives as a core base of the community.



WORKS-1

Happiness in the Street

新虎通りCORE
SHINTORA-DORI CORE

東京都心、新虎通りと日比谷通りの交差点に浮かび上がるランドマーク。あたかもBoxが積み重なるような印象的なシルエット。そのBoxの中からは、生き生きとしたアクティビティが溢れ出し、都心の夜景を彩り、人々を惹きつける。通りを行き交う人を迎え入れるゲート。ストリートに顔を出す開かれたテラス。様々な仕掛けから、新しいシンボルのストリートに賑わいが滲み出す。ルーフガーデンでの、豊かな緑と街に開かれた眺望。事務室の入隅部での、あたかも通り上に浮かんでいるかのような錯覚。オフィスワーカーにとって、ここでしか味わえない特別な体験が、新虎通りCOREにはある。

This is a landmark in central Tokyo at the intersection of Shintora-dori Avenue and Hibiya-dori Avenue. It has a striking silhouette that looks almost like stacks of boxes. Lively activities spill out of the boxes, coloring the night view and attracting people. A gate welcomes the people on the street, while an open terrace faces the street. The hustle and bustle of crowds flow out from various fixtures on to the new, iconic street. The view from the roof garden, with its lush greenery, opens out into the city. The inner corners of the offices give workers the illusion that they are floating over the street. SHINTORA-DORI CORE presents office workers with a one-of-a-kind experience.



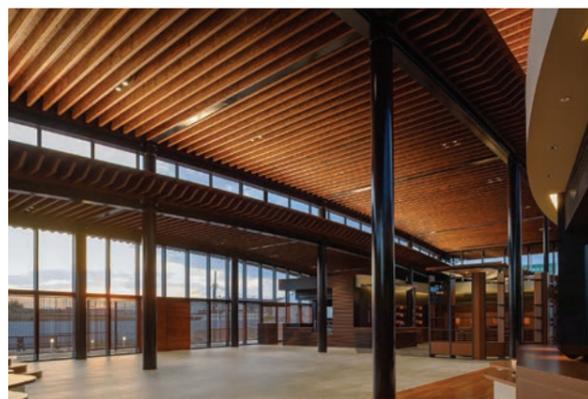
WORKS-2

Happiness in Matière

理研計器株式会社 本社
Headquarters RIKEN KEIKI CO.,LTD.

「マチエール matière」の手法を引用し、空間が創造性をかき立て、従業員が生き生きと働くことができる新たなワークプレイスデザイン。絵の具を重ねて絵画の肌合いを表現する絵画手法であるマチエールを、空間を構成する質感や色をダイナミックに重ね合わせるインテリアデザインへと展開した。コーポレートカラーの赤、水流を表現した石、植物を描いた壁画アート。エリアごとに配された質感と色が、緻密なディテールにより重なり、滲み出し、オフィス全体がゆるやかにつながる様を視覚的に表現した。イノベーションを生み出す企業の本社として、コミュニケーションを誘発し、この場所で働くすべての人のウェルネスに寄与するオフィスを目指した。

The matière painting technique is borrowed to make a space that rouses creativity, resulting in a new type of workplace design that enables employees to work with vigor and enthusiasm. Matière, a layering of paint to give texture to a painting, was applied to the interior design by dynamically layering colors and textures within the space. The red corporate color, stones that express flowing water, and wall art depicting plants—the elaborate details, colors, and textures placed in each area overlap and spread out to create a visual effect that softly connects the overall office. The goal was to induce communication within the headquarters of an innovative company and contribute to the wellness of all who work here.



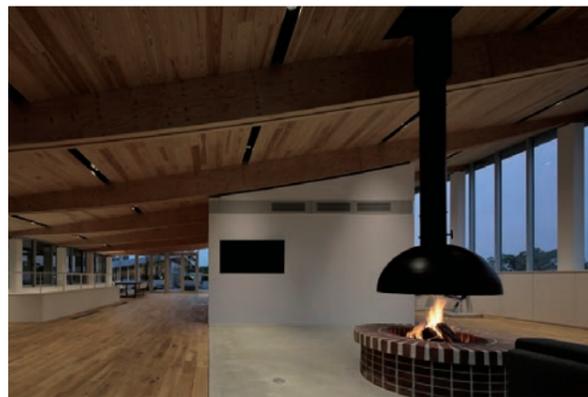
WORKS-3

Happiness in Roofscape

万田発酵株式会社 HAKKO ゲート
Manda Fermentation Co., Ltd. HAKKO Gate

瀬戸内海に浮かぶ因島の豊かな自然の中にある、万田発酵のHAKKOパークや工場を訪れる人々のための施設である。屋根の形は因島の山のゆるやかな曲線と呼応し、山なりへと溶け込む。木架構の3枚の屋根が伸びやかに連なり、風景に寄り添う。屋根の隙間から差し込んでくる光は、木漏れ日のように心地よい。屋根以外はできるだけ透明にすることで、背景の山の木々をガラス越しに感じられる。海側から眺めると、屋根が山並みの一部のように浮かび、風景に調和する姿を目指した。万田発酵の理念である「自然との調和」を体現し、これからも因島の風景を守ろうとする人々と訪れる人々の幸せに寄り添うだろう。

HAKKO Gate is a facility for visitors to Manda Fermentation's HAKKO Park and factory, located on Innoshima, an island lush with greenery in the Seto Inland Sea. The roofs, designed in response to the soft curves of the island's mountains, blend into the mountains behind them. Three flowingly-tiered wood-framed roofs harmonize with the scenery. The light coming through the gaps on the roofs gives comfort, as if it were shining through trees. Most of the structure other than the roofs has been made transparent so that trees and mountains in the background can be sensed through the glass. The goal was to create harmony with the landscape; the roofs look as if they are a part of the mountains when seen from the seaside. The architectural work embodies Manda Fermentation's corporate philosophy, "harmony with nature," and will continue to be there for the happiness of visitors and people protecting the island's landscape.



WORKS-4

Happiness in Nature

ディスコ九州支店
Disco Kyushu Branch Office

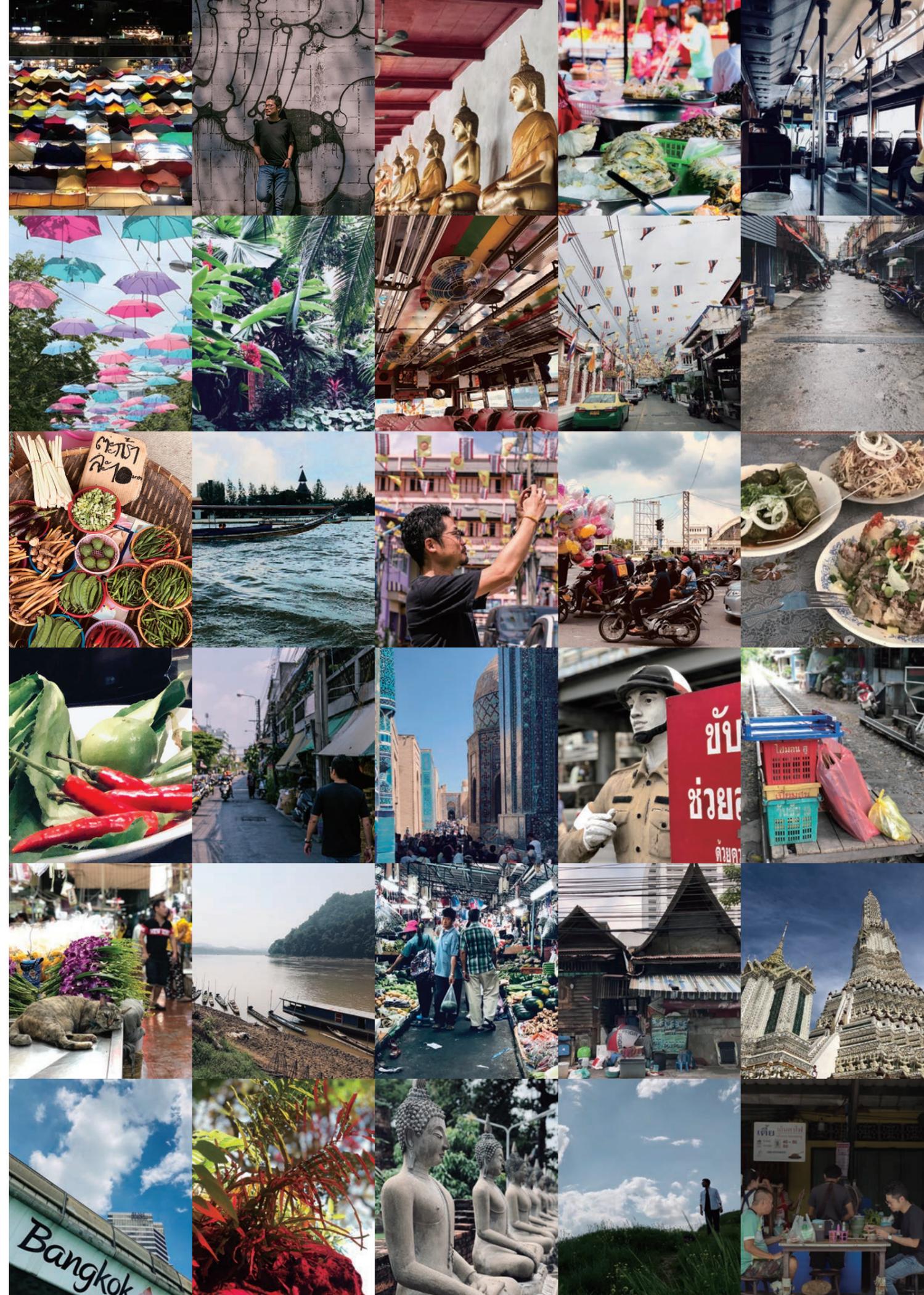
「Always the best, Always fun」という企業理念を体現すべく、ワーカーが快適かつ楽しんで働くことができるワークプレイスを目指した。木漏れ日の揺らぎや森の爽やかな風がワーカーの感性を刺激する、豊かな自然環境を活かした開放的な空間とした。ミーティングや食事など多目的に使えるオープンスペースは、LVL(単板積層材)の大梁が特徴的な木造屋根と無垢フローリングによる木質空間とし、森に隣接したテラスを設けるなど、リラックスして過ごせるしつらえとした。夜には暖炉に火をともし、他では体験できないような雰囲気の中で豊かなコミュニケーションを育むことができる「自然の持つ魅力に寄り添うワークプレイス」となっている。

The goal was a workplace that embodied the corporate philosophy, "Always the best, Always fun," and to create a space where people could work in comfort and with joy. The sunlight, filtering in through the trees, flickers with the movement of the leaves. It stimulates the sensitivities of workers, together with the cool forest breeze. We designed an open space that makes the most of the rich natural environment. Its woody, multipurpose space that can be used for meetings or eating meals is characterized by huge, laminated veneer lumber (LVL) beams, wood roofing, and solid wood flooring. A terrace facing a forest helps people relax. A fireplace can be lit at night to enable communication in a unique atmosphere. This is a workplace that stays close to the charm that only nature can provide.

HITO

Happiness of Working in Thailand

Takeo Iwaoka





初めてタイに来たのはまだ学生の時、1999年だった。その頃のバンコクには高架鉄道も地下鉄もなく、三輪タクシーのトゥクトゥクが生活の足として疾駆していた。それから約20年。急激にスプロールした街には高層ビルが立ち並び、ショッピングモールにはハイエンドブランドが軒を連ねている。

街は変わったが、タイの人の好きには変わりが無い。「サバライ（心地よい）、サヌーク（楽しい）、マイペンライ（気にしない）」とはタイ人の気質を表すによく使われる言葉だが、豊かな気候で育まれた国民性はそうそう変わらないのだろう。

仕事は忙しいが、週末には地元の人で賑わう市場で食材を買い、スパイスをふんだんに使ったタイ料理を作る。身体を動かしたくなればムエタイジムで汗を流し、天気の良い日は部屋の近くのベンジャキティ公園で本を読む。タイに来て1年半、タイ人に倣った「サバライでサヌークでマイペンライ」な生活を送っている。

I first visited Thailand in 1999 when I was still a student. With no elevated railway or subway back then, tuk tuks were the main mode of public transport in Bangkok. More than 20 years later, the now sprawling city is packed with high-rise buildings, and luxury brands line the shopping malls.

The city may have changed, but the people remain good natured. Sabai (relaxed), Sanuk (fun), and Mai pen rai (it's ok) are often used to describe Thai people. Perhaps national traits nurtured in a rich climate do not change easily.

Work is hard, but on weekends, I cook spice-filled Thai food with ingredients bought at a local market. When I feel like exercising, I work out at a Muay Thai gym. On sunny days, I go to nearby Benjakitti Park and read a book. A year and a half passed by in Thailand, now I'm enjoying a "Sabai, Sanuk, Main pen rai" life following Thai people.





「URBAN FOREST」という設計コンセプトを掲げ、都市の中の新しい環境空間を目指し、2021年度の竣工に向けて建設中。インテリアにも「URBAN FOREST」を感じさせるデザインをちりばめながら、建築の内外が連続した一体的な空間となるよう設計している。特徴的なV型コラムには、当社の高層タワー等の鉄骨制作のノウハウを結集させている。BTS NANA駅と直結した敷地前面のオープンスペースには、同じV型をモチーフにしたランドスケープが展開している。プロジェクトを通して生まれるのは建築だけではない。その建築を通して人の生活や周囲の環境が良い方向に動くことを期待して、「O-NES」という名にもそのメッセージを込めた。

Under the "URBAN FOREST" design concept, the skyscraper aims to create a new environmental space within the city and is currently under construction toward completion in FY2021. The "URBAN FOREST" concept will also be scattered in the interior design, creating an integrated space where the feel of the building exterior is echoed within. The distinctive V-shaped columns were realized by the expertise we gained through production of the steel frames for a high-rise tower in Japan and the like. The same V-shape motif will unfold in the open space in front of the building, which is connected to the BTS Nana Station. The name O-NES contains the hope that the project will result not only in the architectural work but also in driving people's lifestyles and the surrounding environment in a good direction.



私が取り組んでいるO-NES TOWERは、これまでのタイのオフィスビルとは一線を画すプロジェクトだ。鉄骨造の超高層ビル、奥行き20mの無柱オフィス、オフィスエリアの個別空調、地上設置の機械式駐車場、WELL認証の取得。これらは一部だが、すべてまだタイにはない試みとなる。大林グループとしても今までにない規模の単独開発であり、しかも海外で初となる自社ビルプロジェクトだ。大林グループ全体の力を結集し、国籍と職種を超えた社内コラボレーションを進めている。

I am currently working on the O-NES TOWER project, which is a fresh departure from other office buildings in Thailand so far. The steel-framed skyscraper will have 20-meter columnless spans and an individual (as opposed to centralized) air conditioning system for the office area, an aboveground mechanical parking facility, and WELL certification, to name some of the firsts in Thailand. Under sole development by Obayashi on an unprecedented scale for the Group, O-NES TOWER is the first overseas Obayashi-owned building project. It is being handled completely by Obayashi, and internal collaboration that goes beyond nationalities and job types is being promoted for this project.





46 | 建築の設計は対話によるものづくりだと考えている。クライアントやプロジェクトメンバーだけではなく、建築を取り巻く環境全体を相手に多くの対話を行う。そして、設計者というメディアを通してその環境を可視化していく。日本でも海外でも、建築を設計するという点においてそこに違いはない。自然環境や法規、仕様や工法は場所により様々で、時には戸惑うこともあるが、自分の常識とは異なる別の常識がそこにあるだけのこと。その常識を受け入れて言葉や文化を超えた対話ができれば、よい建築はどこでも創ることができる。微笑みの国タイといっても、皆いつも心から微笑んでいるわけではない。タイ人の微笑みの中には実に様々な感情がある。困難な状況でも、意見が対立しても、微笑みを通して対話をする。タイで受けたカルチャーショックの1つだが、これはとても大切なことだ。微笑みは、ポジティブに（しかし楽観的なわけではなく）物事に対する双方の対話をスムーズにするための1つの文化なのだ。建築は多くの人たちと共創して、様々な価値観の中でつくられる。価値観の数だけ答えがあるが、建築として残るのは1つだけだ。多くの対話から生み出された建築は、きっとよい建築になると思う。

岩岡丈夫 Profile
THAI OBAYASHI CORP., LTD.
DESIGN DEPARTMENT
MANAGING COORDINATOR

2005年 早稲田大学大学院理工学研究科建築学専攻 修士課程 修了
同年 株式会社大林組入社 建築設計部勤務
2018年 THAI OBAYASHI CORP., LTD. 出向
2020年より現職

I believe that architectural design is the result of much dialogue, not just with clients and project members but also with everything related to the overall environment surrounding the architecture. Visualization of that environment takes place with the designer as the medium. This holds true anywhere. The natural environment, laws, specifications, and construction methods may vary, and it might bewilder me at times. But it is simply that a common sense that differs from my own exists there. If I can accept that common sense and engage in dialogue that transcends language and culture, a good architectural work can be designed regardless of the country. Even though Thailand is known as the "Land of Smiles", not everyone is always smiling from the heart. Their smiles can contain a variety of emotions. People engage in dialogue with a smile on their face, even if circumstances are difficult or there is a disagreement. It caused me culture shock, but it was very important to accept. Smiling is a part of the culture. It makes dialogue progress positively (it does not mean optimistic) and smoothly. Architectural works are cocreated with many people who have a diverse sense of values. There may be as many solutions as there are values, but only one architectural work is created. I believe that a work that is born through much dialogue will become a good piece of architecture.

Takeo Iwaoka Profile

2005 Completed the master's degree program of the Majors in Architecture at Waseda University Graduate School of Science and Technology. In the same year joined OBAYASHI CORPORATION, assigned to the Architectural & Engineering Division.
2018 Seconded to THAI OBAYASHI CORP., LTD.
2020 Appointed to current position.



MAGAZINE

ARCHITORIUM (アーキトリウム) は、大林組設計部の建築作品と設計者を紹介する情報誌です。2017年より発行しています。

ARCHITORIUM is a magazine that introduces the architectural works and designers of Obayashi's Architectural & Engineering Division. The magazine has been issued since 2017.

VOL. 01, 2017 Featured: Obayashi's DNA
VOL. 02, 2018 Featured: GATHERING
VOL. 03, 2019 Featured: In Love with Cities

WEBSITE

ARCHITORIUM Web版は、大林組設計部のプロジェクトを写真や動画で紹介しているWebサイトです。随時更新しています。

The online version of ARCHITORIUM is a website that introduces the projects of Obayashi's Architectural & Engineering Division through photos and videos. It is occasionally updated.

kumitalk

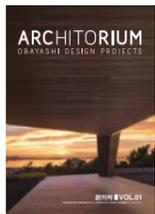
「建設ビジネスの未来を考える」をテーマに、ビジネスや組織の在り方について議論する場「kumitalk (クミーク)」を月に1回程度開催しています。社内外からゲストをお呼びし、レクチャー頂き、クレストークを行います。

A monthly event called "kumitalk" is an occasion to discuss the ideal ways of business and organizations under the theme of "Think about the future of the construction business." Employees or guest speakers give lectures, and cross-talks follow.

DESIGN SESSION

設計段階に合わせて社内レビューを行い、広く意見を交換することで、設計力と品質を高めることを目的としています。

Internal reviews are carried out during the design stage with the aim of boosting design capabilities and quality through the broad exchange of opinions.



創刊号 2017年
特集「大林組のDNA」



VOL.02 2018年
特集「GATHERING」



VOL.03 2019年
特集「都市に恋して」



EDITORIAL NOTE

ARCHITORIUM VOL.02に引き続き、今回VOL.04の担当となったのは昨年10月のことだった。前回は、普段の設計活動とは違った雑誌の編集作業に戸惑いながらも、大林組設計部らしい情報誌とは何かを試行錯誤し、なんとか発刊できたことを覚えている。その経験を活かし、今回はどんなテーマとするか編集会議を重ね、ようやく方針決定した矢先、新型コロナ(COVID-19)の影響で、世の中の生活様式や働き方が急激に変化した。本誌においても、その影響は大きかった。竣工後の建築と人の関係を再撮影するために計画した瀬戸内海因島のロケは中止、小堀様との対談も延期となった。しかし、この突然の変化に対し、大林組設計部も柔軟に対応し変革してゆくチャンスだと思い、発信する内容の再構築を編集チームの総意で決断した。再構築を決断したことで「今」だからこそ発信できる記事になったと感じる。最後に、何度もディスカッション頂いた小堀様、作品掲載にご協力頂いたお施主様、設計者含む関係各位に感謝したい。(嶋原悟)

In October 2019, I was assigned to this volume of ARCHITORIUM (VOL. 04) following VOL. 02. Last time baffled me because the task was different from my usual work as a designer. By trial and error, VOL.02 finally came out. I leveraged that experience this time and held many meetings to choose the theme. COVID-19 struck shortly after we decided on the editorial policy. The pandemic rapidly changed the way we lived and worked. It also impacted this magazine significantly. We canceled a reshoot of the completed structure and its relationship with people on Innoshima Island in the Seto Inland Sea. The dialogue with Mr. Kobori was postponed. Yet, we considered the sudden changes as an opportunity for the Obayashi's Architectural & Engineering Division to respond flexibly and change itself. The editorial team reached a consensus to redevelop the content. I believe this decision has created articles that can only be communicated "now." I would like to express my appreciation to Mr. Kobori for many discussions, the owners for their cooperation with the articles on the works, the designers, and all others involved. (Satoru Shimahara)

日立製作所中央研究所 協創棟 (表1/表4/pp.18-25)
所在地 : 東京都国分寺市
延べ面積 : 16,024㎡
階数 : 地上4階 / 塔屋1階
竣工 : 2019年1月
受賞歴 : 2019年度グッドデザイン賞
第32回日経ニューオフィス賞 クリエイティブオフィス賞

東京医科大学病院 (pp.26-31)
所在地 : 東京都新宿区
延べ面積 : 129,134㎡
階数 : 地上20階 / 地下2階 / 塔屋1階
竣工 : 2019年3月
受賞歴 : 2019年照明学会照明普及賞
第54回SDA賞
日本空間デザイン賞2020
第19回屋上・壁面緑化技術コンクール 都市緑化機構会長賞

新虎通りCORE (pp.32-33)
所在地 : 東京都港区
延べ面積 : 17,433㎡
階数 : 地上15階 / 地下1階
竣工 : 2018年9月
受賞歴 : 第53回SDA賞
令和二年度港区景観街づくり賞奨励賞

理研計器株式会社 本社 (pp.34-35)
所在地 : 東京都板橋区
延べ面積 : 5,176㎡
階数 : 地上4階 / 地下1階
竣工 : 2018年9月
受賞歴 : German Design Award WINNER 2020
第52回SDA賞
A'design award 2019
Architecture&Design; trophy Awards Asia Pacific 2018

万田発酵株式会社 HAKKOゲート (pp.36-37)
所在地 : 広島県尾道市
延べ面積 : 668㎡
階数 : 地上2階
竣工 : 2018年1月
受賞歴 : LIXIL フロントコンテスト2018
2018年照明普及賞

ディスコ九州支店 (pp.38-39)
所在地 : 熊本県上益城郡
延べ面積 : 1,381㎡
階数 : 地上2階
竣工 : 2018年1月

O-NES TOWER (pp.44-45)
所在地 : BANGKOK, THAILAND
延べ面積 : 92,000㎡
階数 : 地上29階 / 地下5階 / 塔屋2階
竣工 : 2021年度竣工予定

発起人 : 川口晋
編集長 : 梅野麻希子
編集メンバー : 井上潔、嶋原悟、佐々木潤一、石井利明、田井飛香
協力 : 木村達治、三木千春、浅沼拓也、馬木直子、郷口亮輔、伊藤翔、安福賢太郎、磯部大喜、武井光、岩岡丈夫、小林航也、谷大蔵、平地博美
外部協力 : 小堀哲夫建築設計事務所
CIC Tokyo
アマナ
NAW inc.
アークコミュニケーションズ

写真・画像提供 : アマナ pp.04-05/pp.12-13/p.15
新井隆弘 p.08 (上)
エスエス 東京支店 pp.32-34 (下)
建築写真 pp.36-37
新建築社写真部 表4/p.23 (下) / p.25
ゴトウフォト p.28
小堀哲夫建築設計事務所 p.05 (下) / pp.08 (上) -10 / p.12 (下)
千葉顕弥写真事務所 pp.26-27 / pp.29-31
鳥村鋼一 pp.38-39
ナカサアンドパートナーズ p.09 (上) / pp.34-35 (上)
吉村昌也 表1 / pp.18-23 (上) / p.24
上記以外大林組

※社団法人格は表記省略

本誌掲載の記事・写真・イラストの無断転載および複写を禁じます。

企画・発行 株式会社大林組本社設計本部
Planned and Issued by Obayashi's Architectural & Engineering Division
Tel.03-5769-1564

ARCHITORIUM VOL.04
12.25, 2020

Kyōsō-tō (Cover-1 / Cover-4 / pp.18-25)
Location : Kokubunji, Tokyo
Total Area : 16,024㎡
Stories : 4F / PH1F
Completion : January 2019
Awards : GOOD DESIGN AWARD 2019
32nd Nikkei New Office Award Creative Office Award

TOKYO MEDICAL UNIVERSITY HOSPITAL (pp.26-31)
Location : Shinjuku-ku, Tokyo
Total Area : 129,134㎡
Stories : 20F / B2F / PH1F
Completion : March 2019
Awards : 2019 Good lighting Award
54nd SDA Award
KUKAN DESIGN AWARD 2020
19th Rooftop/Wall Greening Technology Contest, Chairman's Award

SHINTORA-DORI CORE (pp.32-33)
Location : Minato-ku, Tokyo
Total Area : 17,433㎡
Stories : 15F / B1F
Completion : September 2018
Awards : 53rd SDA Award
Honorable Mention, FY2020 Minato-ku Landscape Urban Development Award

Headquarters RIKEN KEIKI CO.,LTD. (pp.34-35)
Location : Itabashi-ku, Tokyo
Total Area : 5,176㎡
Stories : 4F / B1F
Completion : September 2018
Awards : German Design Award WINNER 2020
52nd SDA Award
A'design award 2019
Architecture&Design; trophy Awards Asia Pacific 2018

Manda Fermentation Co., Ltd. HAKKO Gate (pp.36-37)
Location : Onomichi City, Hiroshima Prefecture
Total Area : 668㎡
Stories : 2F
Completion : January 2018
Awards : LIXIL Front Contest 2018
2018 Good lighting Award

Disco Kyushu Branch Office (pp.38-39)
Location : Kamimashiki District, Kumamoto Prefecture
Total Area : 1,381㎡
Stories : 2F
Completion : January 2018

O-NES TOWER (pp.44-45)
Location : BANGKOK, THAILAND
Total Floor Area : 92,000㎡
Stories : 29F / B5F / PH2F
Completion : To be completed in FY2021

Originator : Susumu Kawaguchi
Editor-in-chief : Makiko Umeno
Editorial Staff : Kiyoshi Inoue, Satoru Shimahara, Junichi Sasaki, Toshiaki Ishii, Asuka Tai
Cooperation by : Tatsuji Kimura, Chiharu Miki, Takuya Asanuma, Naoko Utsuki, Ryoosuke Horiguchi, Sho Ito, Kentaro Yasufuku, Hiroki Isobe, Hikaru Takei, Takeo Iwaka, Koya Kobayashi, Daizo Tani, Hiromi Hirachi
External Cooperation by : Tetsuo Kobori Architects
CIC Tokyo
amana inc.
NAW inc.
Arc Communications Inc.

Photos and Images by : amana inc. pp.04-05/pp.12-13/p.15
Takahiro Arai p.08 (top)
SS Inc. pp.32-34 (bottom)
Kenchikusya pp.36-37
Shinkenchiku-Sha Cover-4/p.23 (bottom) / p.25
goto photo office p.28
Tetsuo Kobori Architects p.05 (bottom) / pp.08 (top) -10 / p.12 (bottom)
Kenya Chiba Photography pp.26-27 / pp.29-31
Koichi Torimura pp.38-39
Nacasa & Partners Inc. p.09 (top) / pp.34-35 (top)
Masaya Yoshimura Cover-1 / pp.18-23 (top) / p.24
OBAYASHI CORPORATION (other than the above)

All Rights Reserved. Unauthorized use and reproduction of articles, photos, and illustrations in this publication are prohibited.



https://www.obayashi.co.jp/design/sp/journal/

